※デザインは変更になる場合があります。

1 **ヴィーナス** 豊饒なる愛と美の女神（9月28日）
2 **肖像画** 姿とこころ（9月28日）
3 **風景画** 自然との対話と共感（11月15日）
4 **宗教画** 聖なるものへの祈り（12月15日）
5 **ヌード** かぐわしき夢（2018年1月15日）
6 **静物画** 静かな物への愛着（2018年2月15日）
7 **風俗画** 日常へのまなざし（2018年3月15日）
8 **歴史画** 人間のものがたり（2018年4月13日）
9 **神話と物語** 創造の玉手箱（2018年5月15日）
10 **象徴と寓意** 見えないもののメッセージ（2018年6月15日）

※各（ ）は発売予定日です。

●全巻一時払い特価　全巻セットをご予約いただくと
50,000円 → 45,000円（＋税）
特価期限：~~2017年12月31日(日)~~ → 2018年1月31日(水)に延長

●第1回配本購入特典

第1回配本『ヴィーナス』または『肖像画』をご購入された方には、お買い求めの書店店頭にて、立体で名画を楽しめる“3Dクリアファイル”を差し上げます。

数に限りがございますので、品切れの際はご容赦ください。

●ご希望の巻の冊数と住所・氏名・電話番号を記入のうえ、お近くの書店店頭へお申し込みください。

●お問い合わせ：集英社 書籍販売部 TEL 03-3230-6393

ご購入申込書

★集英社創業90周年記念企画★
ART GALLERY
テーマで見る世界の名画
●各・本体価＝5,000円＋税
●全巻セット・本体価＝50,000円＋税
※2018年1月31日(水)までに全巻セットをお申し込みいただくと、特価45,000円(＋税)になります。

単巻注文

❶ヴィーナス	2017年9月刊行 978-4-08-157071-3	❻静物画	2018年2月刊行 978-4-08-157076-8
❷肖像画	2017年9月刊行 978-4-08-157072-0	❼風俗画	2018年3月刊行 978-4-08-157077-5
❸風景画	2017年11月刊行 978-4-08-157073-7	❽歴史画	2018年4月刊行 978-4-08-157078-2
❹宗教画	2017年12月刊行 978-4-08-157074-4	❾神話と物語	2018年5月刊行 978-4-08-157079-9
❺ヌード	2018年1月刊行 978-4-08-157075-1	❿象徴と寓意	2018年6月刊行 978-4-08-157080-5

□冊

番線印

ご住所　〒

お名前　　TEL

全巻セット注文 □ セット

書店様へ
初回配本申込締め切り：2017年8月31日
専用FAX 03-3230-2547
●この注文書は、上記FAX番号、または販売会社に早めにお送りください。●番線印ははっきりと。●控えを必ずおとりください。

※お客様の個人情報は本企画以外に利用することはありません。

★集英社創業90周年記念企画★

ART GALLERY

テーマで見る世界の名画

全10巻

2017年9月28日より刊行開始
第1回配本は2冊同時刊行
（第1巻 ヴィーナス・第2巻 肖像画）
以降、11月より各巻毎月15日頃発売予定

集英社

《プリマヴェーラ》サンドロ・ボッティチェリ　第1巻『ヴィーナス』より

刊行にあたって

食卓でも、デスクでも、あるいは膝のうえでもいい。少し大判の本を広げ、名画といわれる作品を身近にゆっくり眺めることができれば、そこに描き出された異次元の世界に引き込まれることになるでしょう。そんな経験したことのない異次元への旅に、この全集はあなたをかならず誘ってくれることでしょう。

青柳正規●監修者

（前文化庁長官／東京大学名誉教授）

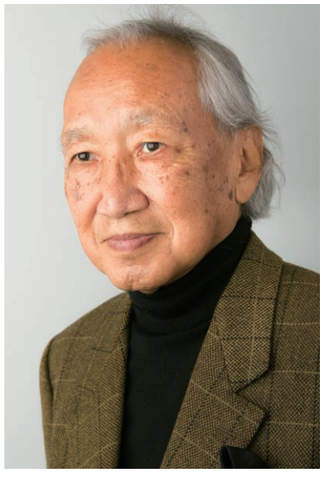
誰もが知る名作・傑作は言うに及ばず、テーマ別画集だからこそ見るべき魅力的な作品も多数プラス。「こんな絵もあったのか」と驚いていただけるはずです。また執筆陣には美術史関係ばかりでなく、文学者やクリエーターなども加わり、多様な視線と自由な心で絵を愉しんでいただけると思います。

中野京子●監修者

（ドイツ文学者／美術評論家）

撮影／亀井重郎

テーマ別美術全集の意義



木島俊介●監修者

（ポーラ美術館館長
Bunkamuraザ・ミュージアムプロデューサー）

本美術全集の最大の特徴は、各巻が「テーマ別」に編集されているというところにある。「テーマ別」という意味は「ジャンル別」ともとれるし、「種類別」とも捉えることができる。20世紀の後半には、多くの「全集」が編纂され出版されたが、「美術全集」も例外ではなく、数多くの刊行がなされ、その内容には三様の傾向があった。基本となっているのはもちろん芸術家個人別の巻立てであり、これに加えて、国別（地域別）や時代別の巻立てがなされた。しかしながら文化を広い視野において捉えようとするとき、芸術家個人の業績とは別の「芸術的主題」、「美術的主題」の展開ということも、重要な意味を担ってきている。例えば、人間の「肖像画」という主題は、歴史の古くからあったとして、「風景画」とか「静物画」とかの主題は、いつ頃から意識され始め、独立した「ジャンル」を形成することになったのであろうか。

時代が近代となって、多くの情報がもたらされることとなると、私たちのおそらく本性によって、これらを分析し、説明し、分類して体系化しようとする動向が生じた。美術の分野においても同様の現象が起った。重要なことは、知性的な充実と感性的な充実とが常に一体となっているということであった。ある主題に焦点を当てた作品が生み出されると、同類の作品が多く生み出されることとなり「ジャンル」が形成される。その共通の「主題」を介して、歴史軸とともに同時代軸、つまり、文化の時間軸と文化の空間軸が同時に提示されることとなるのである。この両者の展開においては、個々のジャンルを超えて他のジャンルと照応を重ねる部分も出てくるであろう。例えば「静物画」のような極めて限定的と思われる「主題」も、「宗教画」や「風俗画」、「風景画」のジャンルとも重なり合い、照応しあって文化の歴史を創り出すとともに、文化の幅を広め合うこととなるのである。そこに、この「テーマ別」の全集が、「全集」として揃えおかれねばならない重要な意味がある。これら全10巻のなかにおいて人間の創造力の個性と普遍とが同時に示されることとなる。

美しいカラー図版は私たちの感性を充足させてくれるし、専門家による適宜な解説は知的な刺激に満ちている。加えて、美術愛好家である作家や漫画家のエッセイが豊穣な薫香によって全集の文化的ニュアンスを大きく開いてくれる。

名画を「テーマ別」に、見て、読む、　まったく新しい美術全集誕生！

アートギャラリー 5大特徴

●監修者
青柳正規（前文化庁長官 東京大学名誉教授）
木島俊介（ポーラ美術館館長 Bunkamura ザ・ミュージアム プロデューサー）
中野京子（ドイツ文学者 美術評論家）

❶古代ローマから2006年までの世界の名画を、テーマごとに全10巻で構成

「ヴィーナス」「肖像画」「風景画」「宗教画」などのテーマごとに作品を見ることによって、時代や画家の枠を超えた新たな発見と感動が生まれます。
※第６巻は日本初の本格的静物画集。

❷約300人の作家の作品、合計650点以上に及ぶ図版をすべてカラーで収録

テーマにそって、各責任編集者が厳選した名画が並びます。親しみのある名画はもちろん、まだ、知られていない名画も収録しています。
※中学校・高校の教科書に掲載されている作品も多数収録。

❸専門家による充実した図版解説と、各テーマの時代背景を詳しく解説

各作品には、その作品の理解が深まる丁寧な解説を加えました。さらに、モノクロページでは、各テーマがどのように描かれてきたかを歴史の流れの中でとらえます。
※各巻末には詳しい年表も収録。

❹作家、漫画家、評論家、研究者による読み応えのあるエッセイを各巻に収録

作家、漫画家、評論家、研究者の方々に、各巻のテーマに関連したエッセイを書き下ろしていただきました。さまざまなジャンルの方々が、独自の視点で絵画を語ります。

❺収録絵画の魅力が存分に伝わる大判美麗本仕様

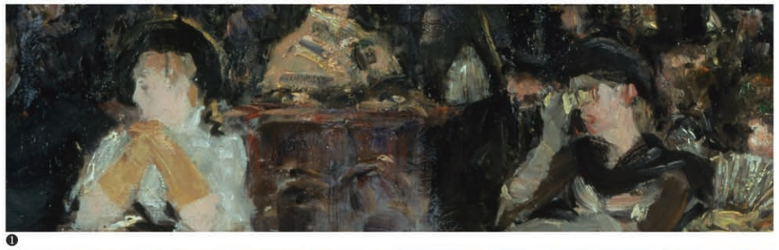
作品の美しさを細部のタッチまでたっぷりと味わえるよう**30×30センチ**の大判サイズを採用。最新の印刷技術で作品の息吹を感じられる、高いクオリティでの仕上がりを実現しました。

※内容は変更になることがあります。

30
フォリー・ベルジェールのバー
エドゥアール・マネ
1882年　油彩　カンヴァス　96×130㎝
ロンドン、コートールド美術研究所

「近代絵画の祖」マネが、早すぎるその死の前年、50歳のときに描いた、彼の芸術の集大成的な意味をもつ作品である。堂々たる存在感のバーメイドが画面中央、カウンターの前に立ち、背後一面の巨大な鏡には２階の桟敷席での雑踏やシャンデリア、光や紫煙の入り混じった喧騒（けんそう）が映し出される。右側にはメイドの後ろ姿と帽子をかぶった男性客の上半身も見える。これらすべては、私たち鑑賞者側にあるはずの現実の情景（実像）に対しての鏡像であり、虚像でもある。舞台は近代都市パリの大衆文化の象徴たる「カフェ・コンセール」で、フォリー・ベルジェールもそのひとつであった。食事やアルコール類を提供し、シャンソンや曲芸などを見せて、ブルジョワジーたちにとっては娯楽と休息の場となっていた。

金髪のメイドは首に印象的な黒帯のチョーカーを巻き、胸が大きく開いた濃紺のコルサージュ（胴着）に赤と白のブーケの盛装姿であるが、その顔は無表情、いやむしろ孤独に沈んでいる。それは、鏡に映った男性客と応対しているはずの彼女の表情としては不自然で、実像の彼女と鏡像でのふたりに関連性はなく、いわば分裂している。ここで鏡は、もはや古典的絵画でのように、現実を忠実に反映してはいないのだ。


❶

❷

❹

❸

❺

部分解説

❶色彩の微妙な筆さばきで印象派風に処理された背後の鏡面で、いちばん目を引くのは２階桟敷席左側の白い上着の女性と、オペラグラスをのぞく女性であろう。ふたりはそれぞれ、マネのモデルにもなったメリー・ローラン（左）と女優ジャンヌ・ドマルシーであることが判明している。

❷左上に断片的に見える、ブランコと棒に掛けた両足（女性のもの）は、この場においてサーカスや曲芸、とくに空中ブランコなども演じられたことを想像させる。事実、フォリー・ベルジェールの当時のポスターには、天井にかけて綱が張り巡らされ、曲芸などが見世物として披露されていたことをうかがわせるデザインもある。

❸バーメイドはここで実際に働いていたシュゾンという女性で、マネのためにポーズをしたことが伝えられている。問題は彼女の表情である。筆触をとどめる大胆なタッチで仕上げながら、どこか憂いに満ちている。一説にあるように、彼女はにわか売春婦も務め、客の誘いに思案しているのか、それともブルジョワジーとメイドという階級差を思い悩んでいるのだろうか。そうした解きがたき、謎めいたところにこそマネ芸術の本質がひそんでいるのだ。

❹カウンター上にはシャンパン、ビール、リキュールの瓶が左右にグループをなして並べられている。左側のグループはその一部が背後の鏡にも映り込み、宙に浮いたカウンターとともに不思議な浮遊感さえ感じさせる。ここに描かれたものすべては、それらを描いたマネみずからも享受したパリの「近代生活」そのものの姿（モデルニテ）であった。

❺カウンターの上に置かれたオレンジを盛ったコンポート皿や花瓶。それらは透明なガラス製の容器で、花瓶のイエローとピンクの薔薇はそれぞれ、少ない筆のタッチで処理されながら、画面から離れて見れば、じつにリアルな存在感のあるイメージを網膜上に形づくるのである。それは、絵画の師と仰ぐベラスケスから学んだ教訓のひとつであっただろう。

★各巻3～4作品の細部を解説！

作品掲載ページは仮見本です。

《フォリー・ベルジェールのバー》エドゥアール・マネ　第2巻『肖像画』より

第**1**巻
ヴィーナス
豊饒なる愛と美の女神

ボッティチェリからルノワールに至るまで、連綿と描かれ続けてきた愛と美の女神ヴィーナスの系譜を新たなる視点で見る。

●責任編集／**青柳正規**（前文化庁長官・東京大学名誉教授）
渡辺晋輔（国立西洋美術館）

●第1巻『ヴィーナス』目次

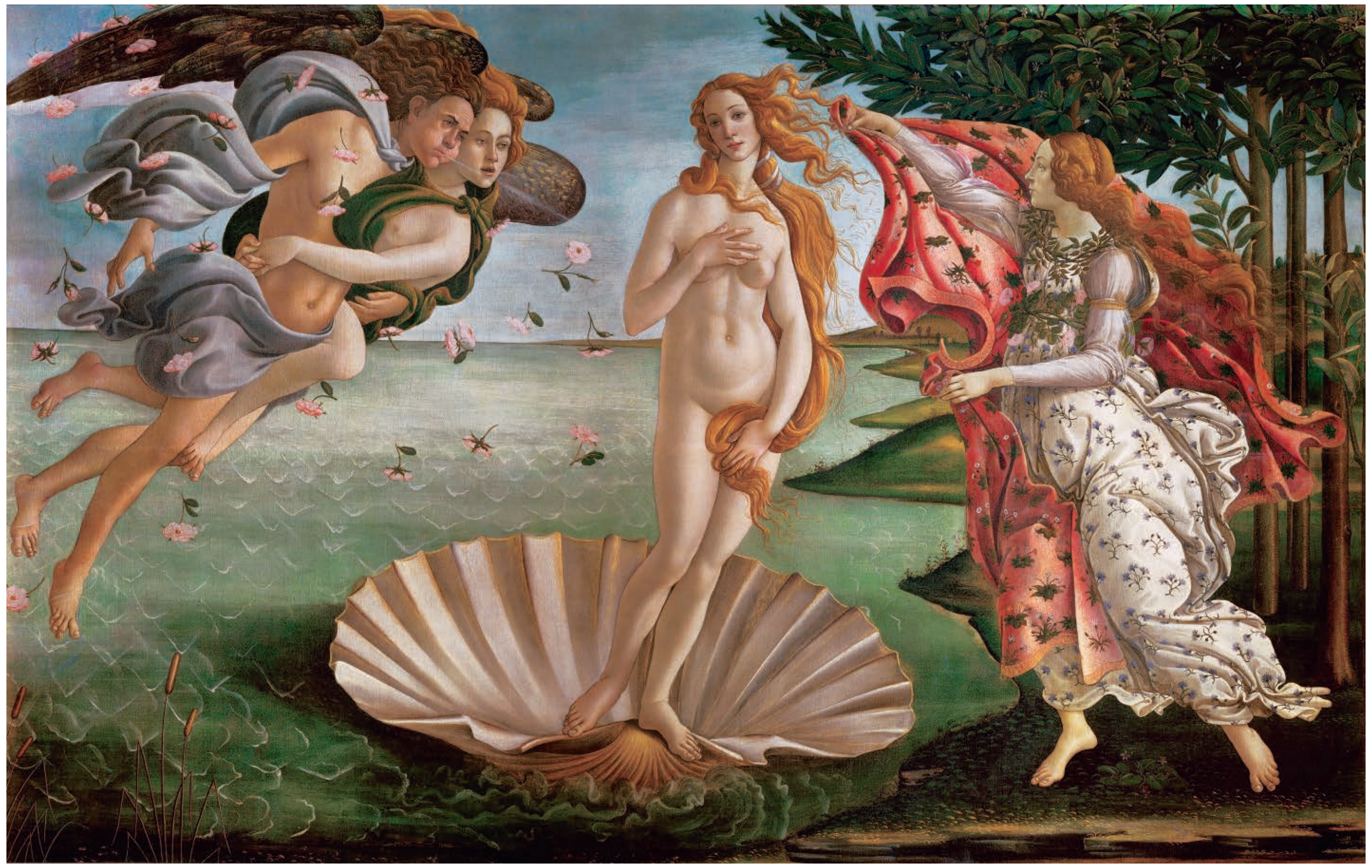
第1章 **美を体現する女神**
第2章 **天上の愛と地上の愛**
第3章 **豊饒と繁栄の象徴**

「ヴィーナス」の系譜／青柳正規（前文化庁長官・東京大学名誉教授）
★エッセイ＝ヴィーナスのいない国から
／**橋本治**（作家）
★ある視点＝ヴィーナスになった女たち
／**鹿島茂**（フランス文学者）
★ギャラリー・トーク＝「帰属作」と「工房作」
／**渡辺晋輔**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《ヴィーナスの誕生》サンドロ・ボッティチェリ
《ヴィーナスの誕生》ウィリアム・ブグロー
《パリスの審判》ピエール・オーギュスト・ルノワール
《ヴィーナスの身支度》フランソワ・ブーシェ
《ヴィーナスと蜂蜜泥棒のキューピッド》
ルカス・クラーナハ（父）
《愛の寓意》ブロンズィーノ
《プリマヴェーラ》サンドロ・ボッティチェリ
《ウルビーノのヴィーナス》
ティツィアーノ・ヴェチェッリオ
全65点

2017年9月28日 発売予定



《ヴィーナスの誕生》サンドロ・ボッティチェリ

12
パリスの審判
ウィリアム・ブレイク
1806～17年 黒鉛 ペン グレーのインク水彩 紙 38.5×46cm
ロンドン、大英博物館

幼い頃から幻視を経験するなど繊細な感受性を発揮したブレイクは、詩と絵画において独自の世界を紡ぎ出した。彼は美術の目的をたんなる現実の再現とは考えず、精神のなかに存在する真実を想像力によって可視化しようとした。その姿勢はこの水彩画にもみることができる。

ブレイクはルーベンスの作例［図11］を下敷きとして描いているのだが、出来上がりはまるで異なる印象を与える。豊かな色彩によって画面を覆うルーベンスに対して、ブレイクは彼が芸術の本質と考える線によって画面を構成し、色彩は淡彩にとどめられる。ルーベンスへのアンチテーゼとして描いたかのようだ。この絵は本来、もう1枚の水彩画《レムノス島のピロクテテスとネオプトレモス》（ケンブリッジ、ハーバード大学フォッグ美術館）と対をなしていたらしい。ピロクテテスはレムノス島でネオプトレモスに説得されてトロイア戦争に参戦し、パリスを射殺した。つまり対作によって、「パリスの審判」が引き起こしたパリスとトロイアの運命を物語っているのである。

20

13
パリスの審判
ピエール・オーギュスト・ルノワール
1913～14年 油彩 カンヴァス 73×92.5cm
広島、ひろしま美術館

ルノワールの死の翌年、アトリエを訪れた梅原龍三郎は、3枚の「パリスの審判」が壁に掛かっているのを目にした。そのうちの1点、最終バージョンがこの作品である。ルノワールは多くの準備素描を残しており、さらには彫刻家と共作でテラコッタ（素焼き）の浮き彫りもつくった。画家がこの主題に並々ならぬ執着をもっていたことが想像できる。

制作にあたりルノワールは過去の作品を入念に研究した。プラド美術館のルーベンスの作品や、ラファエロ原画によるマルカントニオ・ライモンディの版画などを下敷きとしたことが知られている。この絵でルノワールは、ルーベンスらと同じく、あたかもひとりの女性を別の角度から眺めたかのようにして3人の女神を描いた。パリスのモデルとして最初は偉丈夫の俳優を用いたが気に入らず、結局は家政婦ら3人の女性をもとにして描いたと伝えられる。よりやわらかなフォルムを求めたがゆえであろう。

暖色を主体としつつも緑との補色を際立たせる大胆な色彩は、南仏に拠点を移したあとに特有なものであり、フォルムと心地よい調和をみせている。

21

作品掲載ページは仮見本です。

左《パリスの審判》ウィリアム・ブレイク／右《パリスの審判》ピエール・オーギュスト・ルノワール

第**2**巻
肖像画
姿とこころ

誰もが一度は目にしたことがある英雄の顔、王侯貴族の顔、美女の顔……。人物の内面にまで深く入り込む、肖像画の本質に迫る。

●責任編集／**大髙保二郎**（早稲田大学名誉教授）

●第2巻『肖像画』目次

第1章 **肖像画の歩み**
第2章 **さまざまに生きる人間像**
第3章 **家族・群像そして自画像へ**

肖像画の系譜／大髙保二郎（早稲田大学名誉教授）
★エッセイ＝肖像画の旅／**伊集院静**（作家）
★ある視点＝荒木流！ 絵画鑑賞術
／**荒木飛呂彦**（漫画家）
★ギャラリー・トーク＝マスメディアとしての肖像
／**渡辺晋輔**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《モナ・リザ（ラ・ジョコンダ）》
レオナルド・ダ・ヴィンチ
《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》
ジュゼッペ・アルチンボルド
《真珠の耳飾りの少女》ヨハネス・フェルメール
《アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像Ⅰ》
グスタフ・クリムト
《散歩、日傘をさす女》クロード・モネ
《ジュリー・マネ（猫を抱く子ども）》
ピエール・オーギュスト・ルノワール
《少女の肖像》アメデオ・モディリアーニ
《16のジャッキーの肖像》アンディ・ウォーホル
《誕生日》マルク・シャガール
全65点

2017年9月28日 発売予定

《真珠の耳飾りの少女》ヨハネス・フェルメール（部分）

11
若き女性の肖像
ペトルス・クリストゥス
1470年頃 油彩 板 29.1×22.7cm
ベルリン、国立絵画館

無垢の少女か、貴婦人であろうか。あるいはどちらの魅力をも兼備した、冷たくも挑むかのごとき女性肖像である。眉毛はほとんどそられているのか、淡く表現されている。身体をほぼ正面に向けながら、その顔は斜めに向けて視線をわれわれのほうに注いでいる。上半身は円筒形の帽子、卵球状の頭部、四分の三円を繰り返す首飾り、V字形の白色の襟など、幾何学的なフォルムで組み立てられ、著しくモダンな画面を構成する。色調はブルーと寒色系のトーンで全体として抑制されている。そのなかで頬と唇にかすかに添えられたピンク色が微妙な官能性を醸している。空間はわずかに背後の壁板などが暗示されているにすぎず、左上からの光が背後の壁に微妙な影を投げかけ、奥行きが生まれている。

作者は、エイクの後継者としてその工房を継承したと想定される画家だが、彼の独創性はむしろこうした晩年の肖像画に求められよう。人物描写の点ではエイクが得意とした厳格なリアリズムは後退し、むしろこの絵のように、神秘的な雰囲気や濃密な陰影表現を本領としたのであった。モデルが誰であるかは、おそらく永遠に謎であろう。

18

12
モナ・リザ（ラ・ジョコンダ）
レオナルド・ダ・ヴィンチ
1503～19年頃 油彩 板 77×53cm
パリ、ルーヴル美術館

世界で最も有名な絵画であり、また世界で最もよく知られた人物である。しかし、そうした絶対的な名声とは裏腹に、最も神秘的で謎めいた絵でもあるのだ。モデルはたぶん、『美術家列伝』の著者ヴァザーリが伝えるごとく、フィレンツェの富裕な商人フランチェスコ・デル・ジョコンドの妻「モナ・リザ」（リザ・ゲラルディーニ）であるだろう。モナ（正確には「モンナ」）はイタリア語で「奥方」の意で、愛称「ジョコンダ」は姓ジョコンドの女性形である。とはいえ、実在した人物の肖像制作を起点としつつも、レオナルドは終生これを手放さず、不断に加筆を続けて、永遠の母たる女性像に到達したのである。

斜めに座して顔は正面に向けられ、両手を重ねつつ左手を肘掛に載せて大きな三角形構図の底辺を形づくる。髪は薄いベールで覆い、濃緑系のドレスに繊細なプリーツのあるブラウスの姿で、レオナルドの創始による輪郭をぼかして描く「スフマート」の技法が駆使されている。最大の謎とされる微笑はその目や口もとの深遠な描写から生まれ、両手も微妙な表情を見せる。

人物と風景を巧妙に調和させた風景肖像の形式も革新的である。背後に描かれる風景は、近景の大地から川や湖、さらには無限の山岳風景へと続く。こうして「微笑」と呼応するかのように、万物流転の神秘がそこには宿されているのだ。

19

作品掲載ページは仮見本です。

左《若き女性の肖像》ペトルス・クリストゥス／右《モナ・リザ（ラ・ジョコンダ）》レオナルド・ダ・ヴィンチ

第**3**巻

風景画

自然との対話と共感

物語の一場面に登場する風景から、自然に深い共感を寄せて描かれた名画、画家の想像力により変容する21世紀作品までを一望にする。

●責任編集／**山梨俊夫**（国立国際美術館館長）

●第３巻『風景画』目次

第１章 **自然と都市**
第２章 **物語の舞台**
第３章 **想像の構成**

風景画の系譜／山梨俊夫（国立国際美術館館長）
★エッセイ＝永遠の一瞬／**原田マハ**（作家）
★ある視点＝風景画を見る一日／**藤森照信**（建築史家・建築家）
★ギャラリー・トーク＝美術史と画商／**陳岡めぐみ**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《マントの橋》カミーユ・コロー
《サント・ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》ポール・セザンヌ
《曇り日のグランド・ジャット島》ジョルジュ・スーラ
《罌粟の野》グスタフ・クリムト
《フィレモンとバウキスのいる風景》ペーテル・パウル・ルーベンス
《雨、蒸気、スピード：グレート・ウェスタン鉄道》ジョーゼフ・マラード・ウィリアム・ターナー
全68点

2017年11月 発売予定

《星月夜》フィンセント・ファン・ウィレム・ゴッホ（部分）

64
窓から見たパリ
マルク・シャガール
1913年 油彩 カンヴァス 136×141.9cm
ニューヨーク、グッゲンハイム美術館

1910年にシャガールは故郷のヴィテブスクからパリに出たとき、ロシア絵画の陰鬱な色彩とはまったく違うフランス絵画の色彩ときらめきに感動する。それは彼がはっきりと意識しないまま探し求めていた絵画であった。パリではじめて眼にする美術や街の光景に対する驚きと喜びを込めて、描きたかった絵画を自由に描こうとの思いが、この絵にはいきいきと脈打っている。

パリの街並みは傾き、エッフェル塔は単純化される。窓の手すりにいる猫は人の顔をもち、手前の男には前後にふたつの顔があり、ひとつは真っ青である。塔の下では男女が頭を突き合わせて宙に浮き、窓の向こうでは汽車が逆さまになって走る。「われわれの内面の世界はすべてが現実である。おそらく目に見える世界よりもいっそう現実的である」と考える画家の内心で再構成され、ここで彼のパリは、ほしいままの色彩に彩られる。

72

65
街路の神秘と憂愁
ジョルジョ・デ・キリコ
1914年 油彩 カンヴァス
87×71cm
個人蔵

イタリア人の両親をもってギリシャに生まれたキリコは、アテネ、ミュンヘンで美術を学んだのち、1911年にパリに出て詩人アポリネールを知る。４年ほどのパリ滞在中に、画家の変貌は大きかった。この絵はその時期に描かれている。

アーケードの続く白い建物が中心の街の光景には、謎めいた神秘感が漂う。アポリネールが「超現実（シュルレアリテ）」と称した、現実の彼岸が表される。白い建物は強い光に照らされ、前の広場は黄色く明るい。影のような女の子が輪回しをし、広場には姿の見えないもうひとり、大きな男の影が伸びる。手前の黒い建物にもアーケードがあり馬用の貨車が止まっている。人間の要素が描かれているにもかかわらず、人気が感じられない。空は暗く、広場を照らす光の由来がわからず、現実の街を構成する物どうしの関係がはぐらかされ、静寂が訪れる。

アポリネールは1913年にキリコの絵を「形而上的」と称した。この絵もその一例で、現実に詐術をかけて謎に変えるキリコの手法を明白に示している。

73

作品掲載ページは仮見本です。

左《窓から見たパリ》マルク・シャガール／右《街路の神秘と憂愁》ジョルジョ・デ・キリコ

第**4**巻

宗教画

聖なるものへの祈り

物語の宝庫であり、画家たちに数多くのモティーフを提供してきた聖書。西洋絵画に大きな役割を果たした宗教画の傑作を紹介する。

●責任編集／**小池寿子**（國學院大學教授）

●第４巻『宗教画』目次

第１章 **旧約聖書の物語**
第２章 **新約聖書 — キリストの誕生と公生涯**
第３章 **新約聖書 — キリストの受難と栄光**
第４章 **聖母マリアと聖人、民衆信仰**

宗教画の系譜／小池寿子（國學院大學教授）
★エッセイ＝信仰と官能と美術／**池澤夏樹**（作家）
★ある視点＝聖遺物と「願いをかなえる」力／**荒俣 宏**（博物学者）
★ギャラリー・トーク＝額縁の意味／**陳岡めぐみ**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《バベルの塔》ピーテル・ブリューゲル（父）
《岩窟の聖母》レオナルド・ダ・ヴィンチ
《出現》ギュスターヴ・モロー
《聖霊降臨》エル・グレコ
《最後の審判》レオナルド・ダ・ヴィンチ
《柘榴の聖母》サンドロ・ボッティチェリ
《聖アントニウスの誘惑》ヒエロニムス・ボス
《聖女エリザベト》フランシスコ・デ・スルバラン
《乙女を庇護する聖女ウルスラ》ハンス・メムリンク
全68点

2017年12月 発売予定

《受胎告知の祭壇画（メローデ祭壇画）》ロベール・カンパン（部分）

31
エルサレム入城
ピエトロ・ロレンツェッティ
1320年頃 下堂翼廊
アッシジ、サン・フランチェスコ聖堂

「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ」（『マタイによる福音書』21章）。「ホサナ（救い給え）」と叫ぶ人々の声に送られて、キリストは、みずからの死を覚悟したうえで、預言を成就するために驢馬に乗りエルサレムに進んだ。群衆の多くは自分の上着を、またほかの者たちは木の枝を切って道に敷いた。

いよいよ、イエスは苦難が待ち受けるエルサレムに入った。十字架上の死に至る受難の始まりである。

ロレンツェッティは、先達ドゥッチョの同主題の構図にならい、城塞都市エルサレムの門の前に集まる群衆に向かって、驢馬の上で祝福を与えるイエスと、それにつき従う使徒たち、枝をとりつつ行列を樹上で見る子どもなどを描き込み、左から右へと、ぐるりと行列が進むようすを丹念に描いている。

ルネサンス的な透視図法がいまだ用いられていないために、群衆はまるで左右から押し寄せるように中央で驢馬に乗ったイエスに迫り、建物や城壁の角度はばらばらで、空間的統一はない。しかし、ピンク色の建物やイエスの青い衣、灰緑色の樹木など色彩豊かで、幻想的な雰囲気を醸し出し、群衆と景観が渾然一体となった絵画空間と相まって、おとぎ話のような宗教世界をつくり上げている。

福音書に忠実ではあるものの、14世紀当時の都市景観や風俗をも伝えてくれる。

40

32
最後の晩餐
レオナルド・ダ・ヴィンチ
1495〜98年 テンペラ 壁画 420×910cm
ミラノ、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂ドメニコ会修道院

死を覚悟してエルサレムに入ったイエスは、弟子たちを集めて過越祭の夕食を共にし、一同に言った。「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」（『マタイによる福音書』26章）。

レオナルドは、まさにこの瞬間を描いている。テーブルの中心にイエスが座し、画面左端からバルトロマイ、小ヤコブ、アンデレ、ペテロ、ユダ、ヨハネ、一方、画面右端からシモン、タデオ、マタイ、ピリポ、大ヤコブ、トマスの計12人の弟子が座す。

初期キリスト教時代から描かれた重要なテーマであり、裏切り者のユダだけ、テーブルの手前に描くなどの工夫がなされたが、レオナルドの革新は、ユダも弟子たちの列に配置しながら、金袋を握り締めて大きく身を引く動作によってその存在を明らかにしている点にある。のみならず、ユダの左のペテロの鋭いまなざしとヨハネに耳打ちする動作、大きく両手を開いて驚きを表す大ヤコブ、その後ろで天上を指さすトマスなど、瞬間の動作や表情によって感情を見事に表している。

ミラノ君主ルドヴィコ・スフォルツァの依頼によって修道院の食堂に描かれたこの画期的な壁画は、食堂のやや上部に描かれ、食事する修道士たちが目を上げると、イエスの頭部に視線が集中するよう、透視図法が駆使されている。室内空間の連続性を違和感なく実現し、手ぶり身ぶりに深重な意味をもたせた傑作である。

41

作品掲載ページは仮見本です。

左《エルサレム入城》ピエトロ・ロレンツェッティ／右《最後の晩餐》レオナルド・ダ・ヴィンチ

第**5**巻

ヌード

かぐわしき夢

人体の理想の美や躍動感、また悲劇性の象徴として追求されてきた裸体像。女性のみならず、男性ヌードの名作の数々も収載する。

●責任編集／**中野京子**（ドイツ文学者／美術評論家）

●第５巻『ヌード』目次

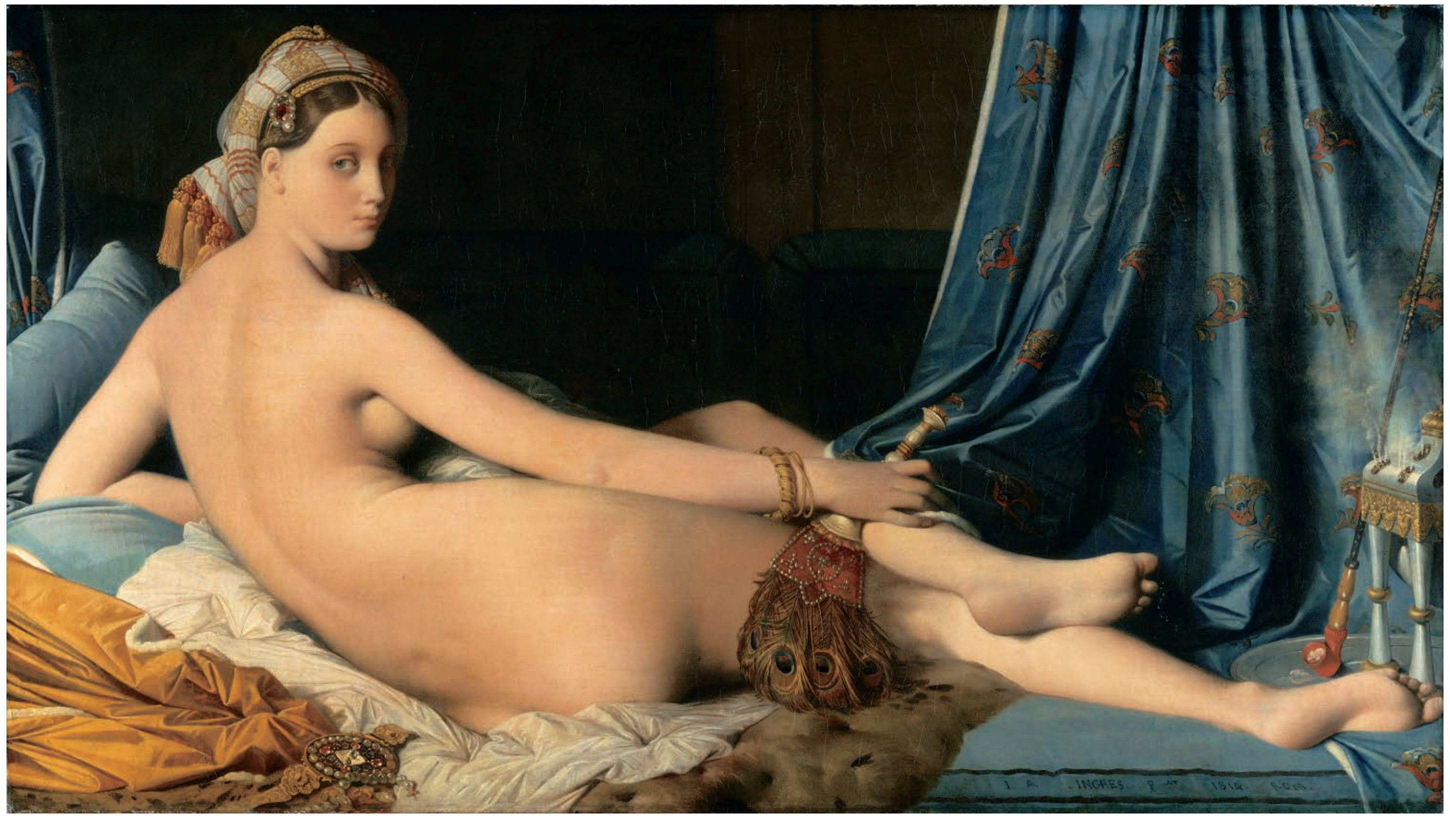
第１章　**美の追求**
第２章　**主張するヌード**
第３章　**肉体のドラマ**

「ヌード」の系譜／中野京子（ドイツ文学者／美術評論家）
★エッセイ＝肉体と油彩／**平野啓一郎**（作家）
★ある視点＝絵画の肉体性の発見
／**横尾忠則**（美術家）
★ギャラリー・トーク＝古代彫刻と修復
／**渡辺晋輔**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《春（ダフニスとクロエ）》ジャン＝フランソワ・ミレー
《ポンペイ》ポール・デルヴォー
《ヘルガ「黒いベルベット」》アンドリュー・ワイエス
《キリスト昇架》ペーテル・パウル・ルーベンス
《家族》エゴン・シーレ
《自画像》フリーダ・カーロ
《ラオコーン》エル・グレコ
《ネヴァモア》ポール・ゴーギャン
《ふたりの男》フランシス・ベーコン
全69点

2018年1月 発売予定



《グランド・オダリスク》ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル

40
アヴィニョンの娘たち
パブロ・ルイス・ピカソ
1907年　油彩　カンヴァス　243.9×233.7cm
ニューヨーク、近代美術館

タイトルだが、有名なアヴィニョン橋のある南フランスの町ではなく、ピカソが子ども時代に住んだバルセロナのアビニョー通りをさす。水夫目当ての娼婦が大勢いた場所だった。

巨大なカンヴァスに裸体の娼婦が５人。中央のふたりは伝統的なヌードのポーズにならい、腕を高く上げて胸を誇示する。右のふたりはアフリカの仮面をかぶっているようだ。彼女らの顔や体は一方からではなく、キュビスムの多視点で描かれている。

はたしてこの裸婦は美しいのか？　仮面には何か意味があるのか？　どうしてこれが名画といわれるのか？――今なお疑問に思う人は少なくあるまい。

だがこれらの質問は反転可能だ。美しいとはどういうことか？　絵に意味は必要か？　誰が名画と決めるのか？――ピカソは既存の価値観を覆し、みずからの可能性をどこまでも追求して、絵画の新たな地平を切り開こうとした。

46

41
凌辱
ルネ・マグリット
1934年　油彩　カンヴァス　73.3×54.6cm
ヒューストン、メニル・コレクション

シュルレアリスム（超現実主義）とは、理性万能の近代に異議を唱え、夢や幻想など非合理的・無意識的表現によって人間性を解放しようとする美術運動だ。マグリットもその仲間のひとり。

もともとは作為を捨てて自由なイマジネーションを展開するはずだが、見る者に画家の幻想を伝えるには結局リアルな描写力あってこそだ。マグリット作品の人気は、きわめて具象的な画面と突飛な発想の結合にある。

雨滴のように無数の紳士たちが空から降ってくる《ゴルコンダ》（ヒューストン、メニル・コレクション）、巨大リンゴが部屋いっぱいを占める《盗聴の部屋》（個人蔵）、あるいはパイプを描きながらタイトルは《これはパイプではない（イメージの裏切り）》（ロサンゼルス、カウンティ美術館）。

本作もタイトルが意表を突く。もちろん着想にはもっと驚く。恐れ入ったパーツである。リアルな人体なので顔にもヌードにも見える（子どもがどんな物にも人の顔を見つけるのと似ている）。この絵は女性に対する男性の普遍的視線を表しているのだろうか。つまり美女と出会った男性は、顔を通して彼女の裸体を「凌辱」するのか。それとも女性の裸体は顔に出現し、目の前の男性を凌辱するのか……。

47

作品掲載ページは仮見本です。

左《アヴィニョンの娘たち》パブロ・ルイス・ピカソ／右《凌辱》ルネ・マグリット

第**6**巻

静物画

静かな物への愛着

卓上に展開する色あざやかな果実、美しい花々。日常に発見をもたらす、静物画の名作群。日本初の本格的な静物画画集。

●責任編集／**木島俊介**（ポーラ美術館館長／Bunkamura ザ・ミュージアムプロデューサー）

●第６巻『静物画』目次

第１章　**日々の幸せのために**
第２章　**卓上の小宇宙**
第３章　**美しい花々**
第４章　**豊かさと美しさ**

静物画の系譜／木島俊介（ポーラ美術館館長／Bunkamura ザ・ミュージアムプロデューサー）
★エッセイ＝そこに閉じ込められているもの
／**江國香織**（作家）
★ある視点＝ナチュール・モルト
／**奥本大三郎**（フランス文学者）
★ギャラリー・トーク＝描かれた楽器
／**渡辺晋輔**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《エマオの晩餐》カラヴァッジョ
《4つの壺のある静物》フランシスコ・デ・スルバラン
《アイリスと百合のある花束》ヤン・ブリューゲル（父）
《春の花束》ピエール・オーギュスト・ルノワール
《ひまわり》フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ
《果物鉢とコップと林檎》ポール・セザンヌ
《円卓》ジョルジュ・ブラック
《テーブル（兎のいる静物）》ジュアン・ミロ
全63点

2018年2月 発売予定

《テーブル上に配されたチーズと果実》フローリス・ファン・デイク（部分）

58
赤の調和、赤い室内
アンリ・マティス
1908年　油彩　カンヴァス　180×220cm
サンクト・ペテルブルク、国立エルミタージュ美術館

マティスとその仲間たちが「野獣派（フォーヴィスム）」の画家と呼ばれたのは、彼らが鮮やかな原色の絵の具を使って激しく感情に訴える絵画を生み出していたからで、ピカソやブラックの「立体主義」の作品が知的な絵画とみなされていたのと対極をなす。人間の内的感情を吐露する「野獣派」の絵画が「表現主義（エクスプレッショニズム）」として、また、人間の外側に存在する事物を知的に処理しているかに見える「立体主義」の絵画が「構成主義（コンストラクティヴィズム）」として20世紀美術の主要なふたつの潮流の基礎をなしたと考えられたのは、両者が知性と感情という人間の精神活動の根本を内在させているからであろう。

マティスのこの「赤い室内」はたしかに、画家の内的な感情の表現ではあるが、感情の手放しの放出ではありえない。テーブル上に食器や果実を配している女性の平穏な心や、それを見ている画家の心に生じている精神的充足、その充足をなんらかの形にしたいという願望、このような抽象的な現象が「赤の調和」という色と形とに具体化されて、「生きる悦び」を表明しているのである。

70

59
マンドリンとギター
パブロ・ルイス・ピカソ
1924年　油彩、砂　カンヴァス　140.6×200.4cm
ニューヨーク、グッゲンハイム美術館

ブラックとピカソとが共同制作のなかで生み出していった「立体主義」の絵画は、世界を構成している事物は、三次元の立体として存在しているという認識を基盤としていた。それゆえ、風景や人物にも増して静物こそが、その探求の対象に最もかなっていたのである。事物は立体である。これは科学的認識であり、人間の外側にある物を判断する客観的な判断であった。しかし、その立体物は、それを見る人間の見方によって違った形態として見える。同じ事物は正面から、側面から、あるいは真上から見るとき違って見える。どの位置から見るかはいわば主観的な判断である。この客観的認識と主観的認識をいかに調和させて、より十全な事物のあり方として絵画上にいかに表現するか。これが、立体主義の画家たちを魅了した困難極まる探索の道であった。

このマンドリンとギターのある静物画では、この困難な探索がこのうえなく自由にのびやかに自然に達成されていて、絵画は完璧な調和に至っている。南仏の窓から入ってきた明るい光があらゆる事物を等しく浸して、この室内をきわめて自然にひとつの平穏な、悦びに満ちた世界にまとめ上げているのだ。楽器や花器や果実は実際にテーブル上に配置されていたのであろうが、それらが「絵画」というひとつの世界に完璧に還元されているのである。

71

作品掲載ページは仮見本です。

左《赤の調和、赤い室内》アンリ・マティス／右《マンドリンとギター》パブロ・ルイス・ピカソ

第**7**巻

風俗画

日常へのまなざし

14～19世紀に至る多様な階層の人々の生活や社会を捉えた作品から、死や愛、エロスなど人間の根幹に迫る現代の名作までを1冊に。

●責任編集／**高橋明也**（三菱一号館美術館館長）

●第7巻『風俗画』目次

第1章 **社会のなかの虚実**
第2章 **家庭と日常生活**
第3章 **情熱とエロティシズム**

風俗画の系譜／高橋明也（三菱一号館美術館館長）
★エッセイ＝絵画が呼び覚ます記憶
／**角田光代**（作家）
★ある視点＝日常のひとこまに息づく美
／**野崎 歓**（フランス文学者）
★ギャラリー・トーク＝展覧会の発生
／**陳岡めぐみ**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《蚤をとる少年》バルトロメ・エステバン・ムリーリョ
《草上の昼食》エドゥアール・マネ
《バレエの授業》エドガー・ドガ
《青い服の婦人》カミーユ・コロー
《ナイトホークス》エドワード・ホッパー
《生のダンス》エドワルド・ムンク
《ぶらんこ》ジャン＝オノレ・フラゴナール
《トルコ風呂》
ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル
《死と乙女》エゴン・シーレ
全67点

2018年3月 発売予定

《舟遊びをする人々の昼食》ピエール・オーギュスト・ルノワール（部分）

29
草上の昼食
エドゥアール・マネ
1863年 油彩 カンヴァス 208×264cm
パリ、オルセー美術館

森のなかでピクニックをする男女。前景でくつろぐ男性ふたりは着衣で女性は裸体。後景には薄物をまとう女性がひとり描かれる。パリの若者たちの行楽の情景を描く、「現代風俗画」の要素にあふれる画面である。
マネはこの作品を「水浴」と題して1863年のサロンに応募したものの落選。この年の審査に他方面から不満の声があがったため、ナポレオン3世の肝いりで「落選者展」が組織され、ほかの作家の作品とともに展示された。
神話や歴史の主題ではなく「現代の情景」を描こうと望んだマネは、ヴェネツィア派の先例にならい、明るい自然のなかに若者たちを配した構図を考えた。人物の大胆な設定や平面的な賦彩法などを含め、その生々しいリアリティーが、保守的なサロンの審査員たちに拒否された原因であろう。裸体の女性は画家お気に入りのモデル、ヴィクトリーヌ・ムーラン、男性はマネのふたりの弟ウジェーヌとギュスターヴかと推測される。

34

30
夏の情景（水浴）
フレデリック・バジール
1869年 油彩 カンヴァス 158.2×158.2cm
ケンブリッジ、ハーバード大学付属フォッグ美術館

南フランスの古都モンペリエに生まれたバジールは、パリに出、モネやルノワールらと深い絆を結んだ。裕福な家庭の出だった彼は、作品を購入するなどして親友たちの制作を支えたのである。
1870年のサロンに出品されたこの作品は、夏の休暇ごとに帰郷していたバジールが、この地方独特の情景を描いたもの。のちにセザンヌも画題にした水浴は、暖かく乾燥した南仏では珍しくない習慣であった。
白雲の浮かぶ青空のもと、白樺に囲まれた爽やかな木陰に集う若い男たち。アルカイックな魅力を見せる半裸の人々は、それぞれが無関心なようすで描かれているように見える。これは、さまざまな過去の作品を研究した画家の苦心の痕跡でもある。左端の人物にはルネサンス期の殉教聖人の画像が、また横たわる人物にはマネの《草上の昼食》の男性像が重ね合わされている。男たちの下着のデザインが、不思議な効果を画面につくり出している。

35

作品掲載ページは仮見本です。

左《草上の昼食》エドゥアール・マネ／右《夏の情景（水浴）》フレデリック・バジール

第**8**巻

歴史画

人間のものがたり

西洋絵画の王道といわれてきた歴史画。偉大な英雄像から、悲劇の場面、戦争の悲惨さまで、時代を映し出した絵画に人間の歴史を見る。

●責任編集／**高橋達史**（青山学院大学教授）

●第8巻『歴史画』目次

第1章 **英雄と民衆**
第2章 **人生の鑑**
第3章 **歴史画の変容**
第4章 **風俗画と歴史画のはざまで**

歴史画の系譜／高橋達史（青山学院大学教授）
★エッセイ＝ダヴィッドという男／**佐藤賢一**（作家）
★ある視点＝描かれた歴史／**樺山紘一**（歴史学者）
★ギャラリー・トーク＝スケッチする画家について
／**陳岡めぐみ**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《ブレダの開城（長槍）》ディエゴ・ベラスケス
《1808年5月3日、マドリード 銃殺刑》
フランシスコ・デ・ゴヤ
《キオス島の虐殺》ウジェーヌ・ドラクロワ
《ソクラテスの死》ジャック＝ルイ・ダヴィッド
《アレクサンドリアの聖カタリナの議論》ピントゥリッキオ
《メデューズ号の筏》テオドール・ジェリコー
《フォキオンの遺灰の拾集》
ニコラ・プッサン
全60点

2018年4月 発売予定

《民衆を導く自由の女神》ウジェーヌ・ドラクロワ（部分）

40
ブルトゥスの
息子たちの遺骸の帰還
ジャック＝ルイ・ダヴィッド
1789年 油彩 カンヴァス 323×422cm
パリ、ルーヴル美術館

主人公はカエサルの暗殺者ではなく、それより500年近く前に活動し、暴虐の王タルクィニウスの追放に成功して、共和政ローマで初代執政官に就任した同名の政治家である。その後も難題は続く。タルクィニウスはエトルリア人と結んで侵攻をはかる。ローマでも王政復古の支持者が顕在化していたからである。ブルトゥスはこの動きに加担した者はすべて死罪に処す、という法令を発布し、自分の息子ふたりが法に触れたことを知ると民心の離反を恐れて断固極刑に踏み切った。息子たちの自宅に運び込まれる様子を正視できぬブルトゥスは暗がりの中で、毅然とした態度は保ちつつ運命の残酷さに打ちひしがれている。
それと対照的に曲線的な家具に囲まれた右半分、すなわち「人情の支配する女性的世界」で、は妻や娘たちが大きな身振りで嘆き悲しみ、泣き暮れている。たったいま息子たちの遺骸を運び込んできた衛士たちの歩みを通じて、時間の流れを暗示した演出も見事と言うしかない。

52

41
メデューズ号の筏
テオドール・ジェリコー
1818－19年 油彩 カンヴァス 491×716cm
パリ、ルーヴル美術館

モーリタニア沖で難破したフランス海軍のフリゲート船「メデューズ」の乗組員は急造の筏での脱出を余儀なくされたが、発見までに15日間を要したため、その大半は餓死し、奇跡的に生き残った13人も後遺症―今で言う「心的外傷後ストレス障害」―に悩まされた。生存者の証言で人肉食が暴露されたこの事件は国際的なスキャンダルとなり、フランス海軍の無能さに対する憤りが随所で噴出した。救出船の姿を水平線上に認めて布を振りかざす人々や、横たわる前景の死者の群など、ジェリコーのこの大作の登場人物は等身大以上の寸法で描かれている。「美の規範」を信奉する古典主義陣営からは酷評されたが、前例のない生々しい迫力に富むこの絵は1819年のサロンで大きな評判を呼び、これに味をしめたジェリコーはロンドン、ついでダブリンで再現劇を伴う展覧会を開催した。フランス・ロマン主義絵画を開拓した本作は、「巡回展」の起源としても大きな意義を備えている。

53

作品掲載ページは仮見本です。

左《ブルトゥスの息子たちの遺骸の帰還》ジャック＝ルイ・ダヴィッド／右《メデューズ号の筏》テオドール・ジェリコー

第9巻

神話と物語

創造の玉手箱

ギリシャ神話に登場する神々の愛憎劇や、中世以降の物語詩・文学に題材をとり、自由に大胆に時にエロティックに描かれた作品群。

●責任編集／**諸川春樹**（多摩美術大学）

●第9巻『神話と物語』目次

第1章 **オリュンポスをめぐる神々**
第2章 **神々の愛と罪**
第3章 **英雄と怪物**
第4章 **神話から人間のドラマへ**

「神話と物語」の系譜／諸川春樹（多摩美術大学）
★エッセイ＝「過剰」の美／**姜尚中**（政治学者／作家）
★ある視点＝禁断の世界を描くこと／**ヤマザキマリ**（漫画家）
★ギャラリー・トーク＝アトリビュートと画中画／**陳岡めぐみ**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《パラスとケンタウロス》サンドロ・ボッティチェリ
《バッカス》カラヴァッジョ
《縛られたプロメテウス》
ペーテル・パウル・ルーベンス
《ダナエ》グスタフ・クリムト
《ヘラクレスとヒュドラ》ギュスターヴ・モロー
《眠れるメドゥーサ》フェルナン・クノップフ
《オイディプスとスフィンクス》ギュスターヴ・モロー
《フィレタスの果樹園『ダフニスとクロエ』より》
マルク・シャガール
全67点

2018年5月 発売予定

《オフィーリア》ジョン・エヴァレット・ミレイ（部分）

作品掲載ページは仮見本です。

左《巨人族の戦い》ジュリオ・ロマーノ／右《わが子を食らうサトゥルヌス》フランシスコ・デ・ゴヤ

第10巻

象徴と寓意

見えないもののメッセージ

目に見えないものを主題として描かれた絵画。愛、死、美徳、正義、嫉妬……。そこに込められたさまざまなイメージを読み解く。

●責任編集／**伊藤博明**（専修大学教授）

●第10巻『象徴と寓意』目次

第1章 **生と死**
第2章 **徳と罪**
第3章 **自然と芸術**
第4章 **運命と現実**

「象徴と寓意」の系譜／伊藤博明（専修大学教授）
★エッセイ＝AならばB、BならばA／**小川洋子**（作家）
★ある視点＝象徴なき、寓意なき革命／**亀山郁夫**（ロシア文学者／作家）
★ギャラリー・トーク＝タイトルと解釈／**渡辺晋輔**（国立西洋美術館）

●主な収録作品

《生きる喜び》アンリ・マティス
《愛の園》ペーテル・パウル・ルーベンス
《接吻》グスタフ・クリムト
《人生》パブロ・ルイス・ピカソ
《叫び》エドワルド・ムンク
《白貂を抱く婦人の肖像》レオナルド・ダ・ヴィンチ
《快楽の園》ヒエロニムス・ボス
《ゆでた隠元豆のあるやわらかい構造（内乱の予感）》
サルバドール・ダリ
《コンポジションⅦ》ヴァシリー・カンディンスキー
《3つの旗》ジャスパー・ジョーンズ
全63点

2018年6月 発売予定

《接吻》グスタフ・クリムト（部分）

作品掲載ページは仮見本です。

《われわれは何処から来たのか、われわれは何者か、われわれは何処へ行くのか》ポール・ゴーギャン

作家、漫画家、評論家、研究者らによる
読みごたえのあるエッセイを収録。

◉一部をご紹介

第1巻『ヴィーナス』「エッセイ」より

ヴィーナスのいない国から …… 橋本 治（作家）

たとえばの話、今ボッティチェリの《ヴィーナスの誕生》を見せられたら、人は「なんと美しい絵だ」と思うだろう。しかし、日本人が初めてこの絵に対した時――もちろんそれは複製の図版のようなものであったろうけれど、どういう感じ方をしたのだろうか？

全裸で大きな貝殻の上に立ち、片手で胸を、残る片手で長い金色の髪を持って股間を隠している。しかもそれが、リアルな女体であるように、美しく描かれている。日本人がこの絵の存在をいつ知ったのかを私は知らないが、この絵を初めて目にした日本人達はどう思ったのだろうか？

第2巻『肖像画』「ある視点」より

荒木流！絵画鑑賞術 …… 荒木飛呂彦（漫画家）

本巻の何枚かを、漫画家・荒木飛呂彦なりの「鑑賞の仕方」を書いていきますね。

まず《パン屋の夫婦（法律家ネオとその妻）》。

2000年ほど前のイタリア・ポンペイで、壁に描かれた一組の夫婦の肖像画ですが、注目したいのは「目」の描き方です。「瞳の中」に描かれている、ホワイトの光の「点」。ポチってある「白」のことです。これは現代日本の漫画家が必ず、キャラクターの目の中に入れるヤツであります。（中略）

とにかく2000年前のこの《パン屋の夫婦》を観て、「ああ……先輩だ」と感動します。

第3巻『風景画』「エッセイ」より

永遠の一瞬 …… 原田マハ（作家）

画家のまなざしというフィルターを通して私たちに届けられる風景には、高速でネット上を行き交う画像データに含まれることがかなわない熱量がこもっている。そこには、私たちが気づかずにいた「美」の新しい地平が拓かれている、それこそが、風景画の特長であり本質なのだと私は思う。

第9巻『神話と物語』「ある視点」より

禁断の世界を描くこと …… ヤマザキマリ（漫画家）

古代ローマ世界と日本には時空を超えた共通点が沢山ある。私が漫画『テルマエ・ロマエ（ローマの浴場）』で描いた公衆浴場での入浴習慣もそうだが、例えば特定の宗教による精神的拘束がない、というのもそのうちのひとつだ。キリスト教やイスラム教といった一神教の倫理観にとらわれない環境に生きてきた多くの日本人にとって、古代ギリシャ・ローマの神々のあり方は、今私が暮らしているイタリアの人達よりも、違和感の少ないものではないかと思うことがある。

※デザイン、内容等は変更になることがあります。

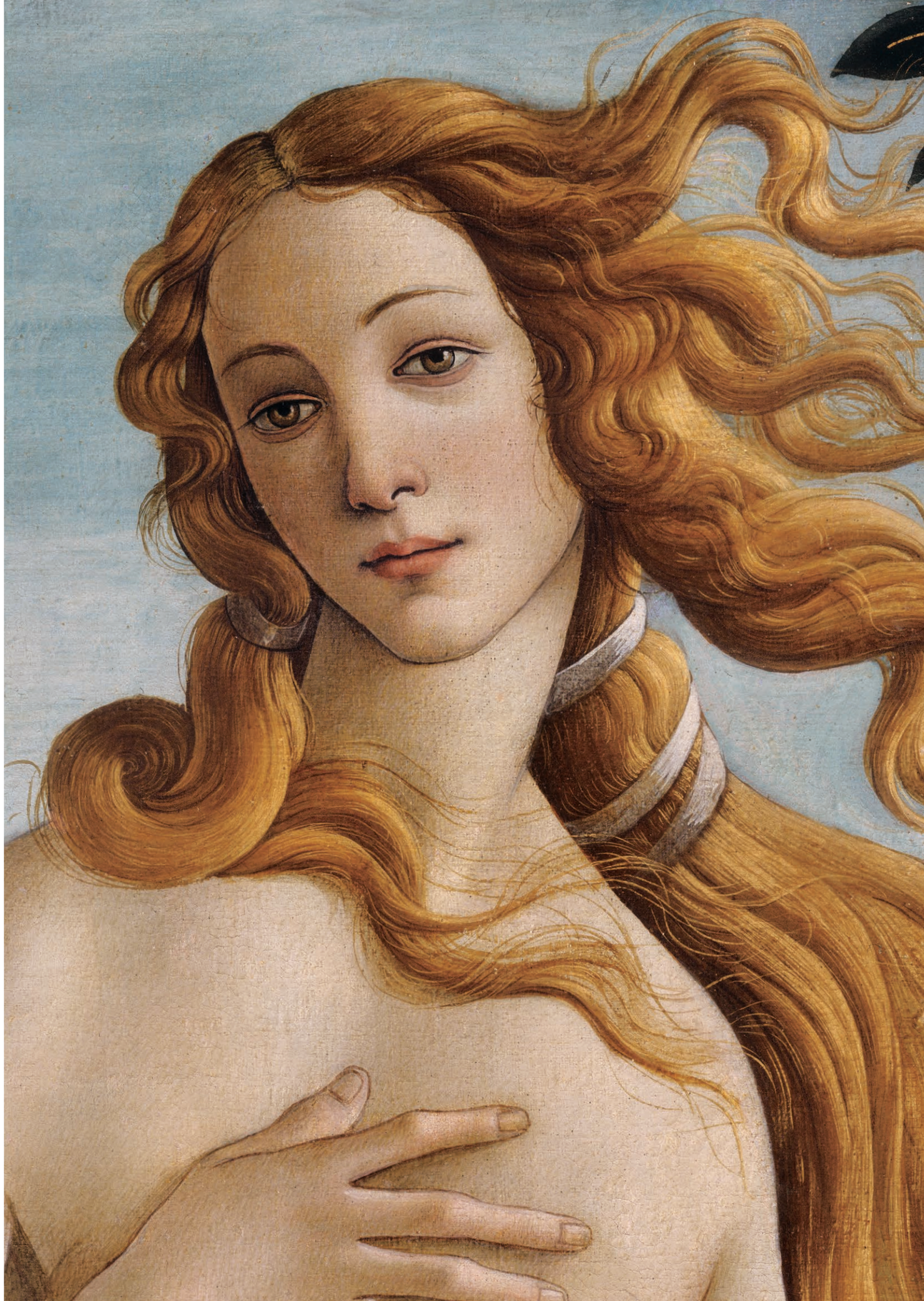



Photo © RMN-GP (musée du Louvre) / Thierry Le Mage, Hervé Lewandowski / AMF-DNPartcom　Photo: Bridgeman Images / DNPartcom
Rijksmuseum, Amsterdam　The Metropolitan Museum of Art　© Tate, London, 2017 / DNPartcom